



TOPIC

- ・事務所ニュース
- ・11月の予定
- ・From Project・North／井堂有子 専門家
- ・From Project・South／郭詠理 専門家
- ・着任挨拶
- ・離任挨拶
- ・My Favorite／辰野加奈 専門家



事務所ニュース

根寄生雑草克服によるスーダン乾燥地農業開発(ストライガ)プロジェクト、実験室お披露目！

10月10日、ストライガ実験室のお披露目式がスーダン科学技術大学農学部において開かれました。3月開始以来、床と壁の改修、実験台の配置、電気配線の整備、ジェネレーターを設置、32種・43台の実験機材の導入、本邦調達機材の搬入を行い、ストライガ防除法の開発に必要な実験環境の整備が一段落。研究者は本格的な研究を開始します。根寄生雑草ストライガは、スーダンの農業生産における最大の生物的阻害要因です。ストライガプロジェクトでは、ストライガ防除法の開発とストライガ防除に資する知見の集約と普及を目指しています。



大使が北ダルフール・エルファシャ州を表敬、州内を視察！

10月18日、和田大使がエルファシャ州政府を表敬、州内の井戸リハビリサイト、技術学校、助産師学校などを視察しました。同州では、JICA技プロ「ダルフール+暫定統治産地域人材育成プロジェクト」の支援で資機材の供与が始まっており、州政府の積極的なコミットメントが求められています。



2本のインフラ事業関係調査団が南部スーダンへ来訪！

1本目の「南部スーダン内水輸送運営管理能力向上プロジェクト」は、3年前にJICAが建設した河川港の運営管理の向上と、職員の研修等を通じた他港への裨益のための技協の準備調査です。河川港拡張の無償事業調査も並行しており、港の規模拡大後も維持管理に対応できるようにデザインしています。2本目はジュバ市を流れるナイル川に新しい橋梁を建設するための「南部スーダン・ナイル架橋建設計画」調査です。現在、ジュバ市には簡易橋が1本あるのみで、増大する交通量に対応できていません。新橋の建設は、経済的にも平和のシンボルとしても大きな期待が寄せられています。



「南部スーダン戦略的保健人材育成プロジェクト」助産師ToTコース開催！

10月18～21日の4日間、南部スーダン各地の助産師学校の講師を対象としたToTコースが開催されました。本研修では、助産の知識・技術を身につける事はもちろん、保健省人材育成課の職員が計画立案、コース内容作成、研修当日の進行、事後評価を専門家と共同で実施し、研修運営能力を向上させる事を目指しました。研修内容も、様々な資材を使用し日本人医師も加わって、南部スーダンではかつて経験したことがない程インテンシブなコースとなりました。この研修結果をもとに、来年以降、南部スーダンの地方州での実施を検討しています。

11月の予定
イベント
調査団

- 11月 2日(火)「ダルフール及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト」職業訓練開講式@カドグリ
- 11月 5日(金) 理数科啓発ワークショップ開催予定@ジョングレイ州ポー(大使及びJICA関係者出席予定)
- 11月13日(土)「南部スーダン都市水道公社水道事業管理能力強化プロジェクト」開始
- 11月23日(火) ジャーナリスト啓発ワークショップ開催予定@ジュバ(元NHK解説員来訪)
- 11月28日(日)「ダルフール及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト」職業訓練開講式@ダマジン

- 11月 2日～17日 「スーダン国ジュバ近郊の平和の定着に向けた生計向上支援プロジェクト」の中間評価調査団
- 11月16日～25日 「南部スーダン政府能力強化支援」調査団
- 11月20日～12月 「ダルフール及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト」中間レビュー調査団
- 11月中旬～下旬 南部スーダン廃棄物管理分野調査団(仮)来訪
- 11月中旬～12月中旬 「カッサラ市給水施設改善計画」第2次現地調査

いろいろなプロジェクトの専門家の方々から、スーダンで活動する中で感じるさまざまな思いや発見などを綴っていただくコーナー。

北部5回目は、ダルフル及び暫定統治三地域人材育成プロジェクトの井堂専門家です。

紛争影響地における人材育成の試み

ダルフル及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト
チーフアドバイザー 井堂 有子

2011年1月に南部スーダンの独立と暫定統治三地域のアビエイの帰属を決める住民投票が予定されている中、スーダンは「二つのスーダン」になるやも、という歴史的瞬間を迎えようとしています。この南北の問題に加え、スーダン西部ダルフル地域においても、2003年の中央政府と反政府勢力間の紛争勃発以降、2006年にダルフル和平合意が締結はされたものの紛争は完全には終結していない状況にあり、現在のスーダンの国としての不安定さの一要因となっています。

本プロジェクトは、紛争影響地における水供給、母子保健、職業訓練の基礎分野の人材育成を目的として、まずはダルフル地域を対象として2009年6月より3年間の予定で開始されました。その後、南北スーダンの境界にあり南北両政府が共同で統治を行っている暫定統治三地域（*注）の安定と発展はスーダン全体の安定化に大きく資するであろうという観点から、2009年12月、対象地域を同暫定統治三地域へと拡大し、現在に至っています。（*注）暫定統治三地域の内、アビエイ州は未だ不安定要素が強いので、青ナイル州、南コルドファン州を直接のプロジェクト対象とする）

プロジェクトの具体的な活動は、研修、機材供与、パイロット事業の実施の3コンポーネントから成っています。上記3基礎分野における州レベルでの技術者研修、必要な機材供与を行い、その後各技術者が自らの州に戻り、研修期間に習得した知識や技術を普及するための各自のパイロット事業を実施します。研修と機材供与はJICA側が負担、パイロット事業実施にかかる事業費は州政府側が負担することで、スーダン側のコミットメントとオーナーシップを促す仕組みとなっています。なお、特に水と母子保健に関しては、現在実施中のJICA技術プロジェクト（「水供給人材育成プロジェクト」と「フロントライン母子保健強化プロジェクト」）からの強力な技術支援を得て実施されてきたことを特記させて頂きたいと思えます。

私自身は着任して未だ1カ月ではありませんが、本プロジェクトは非常に困難かつチャレンジングなプロジェクトである、というのが率直な理解です。とはいえ、各種制度や治安がある程度整った他の途上国における「通常」の技術協力プロジェクトや人材育成であっても、様々な課題のない現場は恐らくないであろうことを思い起こせば、紛争被災・影響地における人材育成が難しくないはずはありません。「人作り」は「国作り」であるといいますが、紛争直後・継続中の治安が安定していないところでの「人作り」の難しさを思い知らされている毎日です。

本プロジェクトの難しさは多々あります。まずは、プロジェクト対象地域が未だ治安面で不安定地域であることから日本人専門家も直接入れないこと、従って研修実施も

首都ハルトウムか日本で行い、機材供与やパイロット事業実施にかかる各種調整・準備も連邦政府と州政府を通じた遠隔操作となっていること、一方で全体的調整を図るはずの連邦政府機能が脆弱であること。3分野に跨っていることから関係機関が多いため情報共有・調整作業が極めて煩雑とならざるを得ないこと、紛争被災地という共通項はあってもそれぞれの技術レベル・ニーズが必ずしも同じではないこと、開始時期の違いから各活動の進捗状況も同じではないこと、等々。日本側のリソースの限界やスキームの複雑さも素直に認めた上で、紛争被災地の人材育成を目指していくのは並大抵のことではありません。



10月5日～7日に開催されたPCM研修。講師を務めた中元専門家と発表を行う南ダルフルからの参加者

同じくPCM研修。北ダルフルの職業訓練学校校長が若年層の失業問題をテーマに報告している様子



と、未だプロジェクト現場を訪問できず悶々としている私には困難さばかりが目に入ってきていましたが、現場からの人々の声を聞くこととはどのようなルートであっても大切なことです。

10月5日～7日にかけてハルトウムでダルフル3州の技術者を対象にPCM研修が実施されました（講師は中元則晶専門家）。また10月12日～13日は、ダルフル及び暫定統治地域への機材供与引き渡し式がハルトウムの地方自治最高評議会にて開催され、和田日本大使、宍戸JICA事務所長にもご出席頂きました。これらの機会を通じて、初めて現場の方々にお会いし、これまでに実施された研修や供与された機材、今後の予定についてお話を聞くことができました。人道援助を通じた物資の配給に慣れ切ってしまったこの紛争被災地の人々にとっては、現場で役立つ貴重な機材の供与とそれを使いこなせる人材の育成、という支援アプローチは新鮮に映っているようです。なお、パイロット事業費支出に関し、州レベルで財政的コミットメントがなされていますが、

本プロジェクト立ち上げから関わっているわが同僚アブデルガーデル氏曰く、「州が予算を出すという決定を行ったのは丸抱えの支援に慣れ切ったスーダン国では全く初めてのことで、これだけでも大きな成果」とのこと。通常は穏やかな彼の感動振りから確かに大切な一歩であることが窺えます。

長い植民地統治の歴史、独立と紛争、多様な民族と言語、宗教を抱え込んだ複雑な社会構成を背景とした、南北紛争とダルフル紛争の複雑な要因を語る知識も事の是非を判断する権利も私にはありません。けれども、スーダンが「二つのスーダン」になったとしても、大統領が国際司法裁判所から逮捕状を受けていても、ここに人が住む限り、紛争を終え、人々と社会に安定と発展の道筋と機会を与える義務がスーダン政府（中央の連邦政府と地方の州政府）にはあると思います。そのための政府の統治能力の強化が必要であり、このプロジェクトがわずかなりともその基盤整備の一助になることを願いつつ、地図を眺めては、渡航許可が下りて現場の活動を直接見ることが出来る日を心待ちにしている毎日です。



10月13日の暫定統治地域に対する母子保健分野の機材供与引き渡し式。機材を前に日本大使と地方分権化最高評議会大臣が固く握手



カウンターパート機関である地方分権化最高評議会にて。右より、プロジェクトメンバーのアブデルガーデル氏、松岡職員、サラハアッディーン次官、筆者

井堂 有子

いどう ゆうこ／ダルフル及び暫定統治三地域人材育成プロジェクト・プロジェクト管理。エジプト、シリア勤務を経て、2010年9月末より本プロジェクト担当としてハルトウムに赴任。思った以上の暑さと物価の高さに驚くとともに、アラブとアフリカが融合したこの地の多様性とナイル川の流れの如き人々の大らかさに感銘を受けている今日この頃。



いろいろなプロジェクトの専門家の方々から、スーダンで活動する中で感じるさまざまな思いや発見などを綴っていただくコーナー。

南部2回目は、ジュバ近郊の平和定着に向けた生計向上支援プロジェクトの郭専門家です。

ジュバ農業所感

ジュバ近郊の平和定着に向けた生計向上支援プロジェクト

郭 詠理

私がここジュバに来て、早や1年となる。今ジュバ郡では、雨季も終わりに近づき農家は農産物の収穫に精を出している。LIPSでは農業を生計向上の一手段として据え、今年度はグループ農場と個人農場の2パターンから成るモデルプロジェクトを、8サイトで実施した。このうち2サイトでは、雨季・乾季各々に対応したデモンストレーションファームを運営している。ジュバの農業生産を取り巻く環境は、自然的にも人的にも厳しい。「乾季:灼熱の太陽+干からびた大地=不毛の天水栽培」。「雨季:播種のタイミングを定めにくい優柔不断な降雨+猿・リス・鳥だのといった対処難な害獣+シロアリやらコオロギやら対処難な害虫=どこか煮え切らない収穫シーズン」。これらに加え、何とも不可解で掴み所のない農村の人々がいる。“Farmer”と呼ばれるにも拘わらず、道具もタネもなく(隠しているパターンも多々)、こちらへの要求だけは凄まじい。ごく稀に先鋭的な農民も存在する。しかし、農家の技術は概して経営レベルに至っていない。ジュバのマーケットを覗くと、鮮度命の葉物をのぞき、そこで売られている野菜や果実の殆どがウガンダやハルツームから輸入されたものである。

プロジェクトでは、モデルサイトでの訓練を始め、上述デモファームでの訓練、サイト間ツアーも行って来た。タネの配布に当たっては、先ず「配布したタネを食べてしまわないように、道具を売り払ってしまわないように」といったことから、しつこく訴えていく。実際にタネを播く段階になれば、「ばらまかないで、ラインに沿って播く」とか、「播いた

タネは土で覆う」とか、「苗を作ったら必ず定植する」とか、基本的なことを何度も何度も伝えていく。



トマト栽培訓練@カプリデモファーム



間引き訓練

ジュバで一年間を過ごし、改めて実感している事だが、内戦の影響もあって農業の技術向上は著しく停滞している。しかし、細々ではありながらも、人々の誰もが大人小なり畑と共に生きてきたことも事実であろう。今や日本の子供の多くがコンピューターと共に育つように、こちらの子供は農業と共に育っていく。オフィススタッフや運転手の中にも、サイトを訪れれば自ら鋤を取って農民と一緒に耕したり、自然と水やりの手伝いを始めたりする者がいる。人々の生活は、いまなお農業と密接に繋がっているようだ。このような中、例えばLIPSによる学校菜園プロジェクト一つとっても、家で毎日野良仕事をしている子供たちが、学校に来てまで喜んで菜園で働きたらどうか。この人たちが大きなやりがいを感じるとすれば、それは即ち自給レベルを超え、美しい野菜を作り、それを売って儲ける醍醐味を味わう時ではないだろうか。

今、収穫期を迎え、農民たちは少しずつ違いを感じ始めているようだ。ラインに沿って生え揃う落花生や、たわわに実るメイズ。そして竹棒に支えられ伸び伸びと育っていくトマト。彼らが「ものづくり」の楽しさを感じていると言うには、まだ早いかもしれない。しかし、次シーズンへ向け、意識は着実に変わってきている。学校菜園から個人農場、そしてグループ農場、デモファームまで、農民もC/Pも携わる人々すべてが、技術の重要性と収益へ繋がる農業を実感できるようなプロジェクトを実施していきたい。



収穫後のメイズとともに



郭 詠理

かくえいりノ

ジュバ近郊の平和定着に向けた生計向上支援プロジェクト(通称LIPS)、園芸作物および研修担当として2009年9月、ジュバに赴任。趣味は料理。

着任 挨拶



村川 太志郎 所員 <JICAスーダン駐在員事務所>

10月12日にスーダン駐在員事務所に着任しました村川と申します。こちらでは、「ダルフル及び暫定統治3地域人材育成プロジェクト」、「水供給人材育成計画プロジェクト」を主に担当いたします。専門家の皆様をサポートし、スーダンの発展のために貢献していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



鹿野 正明 在外専門調整員 <JICAスーダン駐在員事務所>

10月3日に着任しました鹿野と申します。業務では、ダルフル及び3Areasにおけるプロジェクトの機材調達などのサポートをさせていただきます。以前、協力隊(コンピュータ技術隊員)としてウガンダで活動していたこともあり、スーダン事務所ではIT関連業務も担当させていただきます。1年間の任期となりますが、スーダンを満喫したいと思います。よろしくお願いいたします。



長田 彩子 在外専門調整員 <JICAスーダン駐在員事務所>

10月12日に着任しました長田(オサダ)と申します。主に農業分野での山田企画調査員のサポートと、広報業務をさせていただきます。アフリカ大陸に足を踏み入れるのは初めてで、文化の違いに戸惑いつつも、こちらの生活を楽しんでおります。至らないところもあるかと思いますが、1年間、どうぞ宜しくお願いいたします。

離任 挨拶



松岡 秀明 所員 <JICAスーダン駐在員事務所>

このたび、2年間の勤務を経て、帰国することになりました。皆様には、大変お世話になりました。実際のところ、まだまだやり残していることがたくさんあり、このタイミングで去ることに心苦しさもありますが、あとは事務所のエース、村川君に引継いでいきますので、どうぞよろしくお願い致します。次は本部地球環境部・環境管理第二課に勤務することになります。スーダンとはしばらく離れますが、また機会があったら戻って来たいと思っています。



須山 恭世 在外専門調整員 <JICAスーダン駐在員事務所>

穏やかな人々に囲まれ、私も「タマム！」を連発する日々でした。

短い任期となりましたが、これからも大切にしていきたい出会いにも恵まれ、スーダンとの縁に感謝しています。お世話になったみなさま、ありがとうございました。

My Favorite

午後のコーヒー

辰野加奈 専門家 (NGOロシナンテス/ガダーレフ州)

シェリフハサバラ村における母子保健サービス強化プロジェクト)

診療を終える午後2時、私は決まってスタッフの家にコーヒーを招待されます。娯楽の少ないハサバラ村において、炭で煮るところから始めるこのコーヒーの時間が情報の場、交流の場、娯楽の場となります。日本の茶道がもつ繊細さからは程遠いのですが、「人をもてなす心」には共通したものを感ずるし、じっくり時間をかけて「茶」を交わして築かれる関係が、この村において人と人

を昔から当たり前前に結びつけてきた大事な習慣なのだということも簡単に理解できます。コーヒーを楽しむ1時間の間、子供たちが無邪気に遊ぶ声、聞こえてくる動物の鳴き声、皆が話すアラビア語をバックに、ベットの横になりながらリラックスし無心になり、時に仕事で頭を悩ます(理解し難い)伝統的思考を振り返ってはそのギャップを埋めています。ハサバラで味わうお茶には、ドトールにもスターバックスにもつくり出せない、スーダンならではの特別な味わいがあるのです。



編集後記

風がだいぶ涼しくなってきた11月初旬のスーダン。10月、JICA事務所は少し顔ぶれが交代しました。お立ち寄りの際はお気軽にお声をおかけください。

ニュースレター、次号は12月です。

JICA Sudan News Letter/ vol.5

JICA Sudan Office

House#14, Block #10, St.49

Amarat, Khartoum, Sudan

発行: 広報担当